



Title	ぬすみ食い-ネコ・イヌ・サル・類人猿・幼児・未開人における比較- III
Author(s)	鳥居, 正夫
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1970, 11, p.17-26
Issue Date	1970-12-25
URL	http://hdl.handle.net/10069/9579
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-19T21:05:30Z

ぬ す み 食 い

——ネコ・イヌ・サル・類人猿・幼児・未開人における比較——

III

鳥 居 正 夫

Eating by Stealth

——A Critical Comparison of Pre-Morals among Cats, Dogs,
Monkeys, Anthropoids, Infants, and Primitive Men——

PART III

MASAO TORII

総目次 I. まえがき II. ネコ III. イヌ (前号) IV. サル (本号) V. 類人猿
VI. 幼児 VII. 未開人 VIII. 総括

Contents: I. Introduction II. Domestic Cats III. Domestic Dogs (the Previous
number) IV. Monkeys (this number) V. Anthropoids VI. Infants
VII. Primitive Men VIII. Conclusions

IV サル MonKeys

(1) 敵の攻撃からの逃避の態度

餌づけされたニホンザルが、売店のキャラメルをすきをみてとって逃げたり、見物人のもっているピーナッツを袋ごとかっぱらって逃げるという行動は、のらネコがすきをねらって焼魚をくわえて逃げる行動と同様で、うまく敵の攻撃をかわして食物をとるということではない。

餌場やケージの中で、ばらまかれた食餌をサルの強者が独占して食べている。まわりに坐ってみている下位者たちが、強者が手をだそうとしたやつを攻撃しているすきに、食餌をつかんで逃げたり、また強者が背を向けた瞬間ぱっと手近の食餌をつかんで口に入れたりする。これらも外敵の場合ではないが、同様な行動である。

(2) 強者に対する服従の態度

サル (Monkey) と言っても、その高等段階にある狭鼻猿 (オナガザル) 科にかぎるが、それでもその社会形態は「目」によって変異が大きく、同一目 (たとえばニホンザルに見られるように) でもまた幅の広い変異をもっている。しかし概言すれば狭鼻猿は、強弱の程度のちがいはあるが、社会的階層 (クラス) と順位制をもっている。かれらは半地上性だが、地上生活が多くなる種ほど、社会構造はきびしい。ヤセザルの1種のラングール (樹上性あるいは半地上性) やパタス (地上性) ではクラスや順位はあるがゆるやかであり、マカック類 (アカゲザル・ニホンザル・ボンネットザルなど) とサバンナのヒヒは強固な階序制をもっている。

ニホンザルの餌づけ集団のなかで (サル全種のなかで、と言ってよかろう)、もっとも階層的秩序のきびしい高崎山の J 型 (18, P.33) の群れでは、中心部のリーダー・メス・コドモたちが食べているときは、サブリーダーやワカモノは入って行って食べることができない。中心部が山へ引き上げたあと、サブリーダーたちが餌場に入り、かれらが去ってようやくワカモノたちが入場して食べることができる。個体間の順位関係も、リーダー・サブリーダーの間では明確であり、オトナオスの間でもある範囲において強くあらわれ、オトナメスの間にもある範囲で弱いけれども存在する。2頭の間にミカンなりピーナッツなりを投げてやる順位テストを行うと、順位関係があきらかになる。いつも一方がとり、他方は気がつかないふりをしたり、わきみている。その前に投げてやってもとらず、くりかえすと立ち上って去ってしまう。だからオトナオスの間で食物のうばいあいなど起らない。しかし順位落差が小さく、あいまいな場合、とくにメスの間、ワカモノの間では食物をめぐる争いが起る。

パタスにおける順位関係は弱い、それでも社会的階層がある程度存在していることは、つぎのできごとにも示されている。大きなきのこのかたまりが群れによって発見された。オトナオスか子どもをつれた年長のメス以外は、獲得することは非常にまれである。オトナメスはほかのメスか若いオスをおい、ときどきそれらが落した全部か一部をえた。20分間かかったが、競争はあったが、たたかいはなかった。せわしく食べているオトナメスから2メートルのところから坐っていたオトナオスは、メスからとるとか、おいはらおうとかしなかった。乳児はときどきオトナオスのそばに坐り、落ちたかけらを食べていた。乳児は大きなかけらをつかもうとしたがとることはゆるされなかった。(10, P.76)

また野生のアカゲザルに対する給食器を使ってのテストに、あるサルたちがずぶとい服従によって、うまくやったりしたことが観察されている。中央部の低いランキングのオスが給食器でのいざこざをさけ、むらがりのはしに待っていて、自分より上位のサルがいなくて突込んで食物をつかんだ。周辺部の最下位者は、あうサルみなに服従となだめの態度をとることによって、しぶとく給食器のまわりにいつづけることをゆるされ、こそこそする必要がなく、たやすく食物を手に入れることができた。(16, P.82)

弱者が食物を強者に乞い、分けてもらおうということは、霊長類ではチンパンジーにしか見られない。ニホンザルでオスが発情期にメスをつけまわして、なかよくしてもらうために食物をゆずることが例外的にあらわれる。高崎山 B 群第3位のリーダーがメスのあとをおっていた。

ピーナッツを2頭の間に投げた。リーダーはメスにリップ・スマッキングをした。彼女はしばらく顔をうかがっていたが、やがてヘッピー腰で手をのばし、ピーナッツをとった(23)。

サルのような高等動物になると勝負は肉体的な闘争力だけできまるのではなく、心理的なものが大きく加えられており、さらに社会的関係が含まれている。だから強弱関係というよりは優劣関係である。上位のメスである母親が後にいる場合、こどもは自分より順位の高いオトナ(メス)やワカオスなどをおさえて食物をとる。

集団の中へ食物を投げた場合も順位が出るが、このような依存順位(18, P.58—9)などいろいろな要因が入りこんでいるため、ペアテストの組み合わせによる順位とちがってくるのがふつうである。ペアテストと集団テストによる順位の相異については、シュミットがイヌについても指摘しているが(26, S.275—7), サルの場合はずっと大きい。

強者の攻撃をやめさせる方法として、動物の弱者にはいろいろな態度がある。まず服従を示す信号をおくる; まったく動かなくなる, ちごこまる, 顔をそむける, 最も傷つきやすい急所をさらす, つぎに相手の攻撃衝動をなくする。たとえばこどもが餌をねだる姿勢をとる。鳥類のつがい形成期にオスに攻撃されたメスがこの姿勢をとる(25, P.137—9; 訳 P.153—5)。これはすでに儀式(ritual)であるが, つぎのサル類になって現われる儀式は一段とシンボル性が強い。敗北者がメスの姿勢をとるプレゼンティング(尻をさし出すことが勝利者に性的反応を起し, 攻撃の気分をやわらげる), 親愛の表現であるグルーミング, それから変化して儀式化されたリップ・スマッキング。

そのような儀式〔儀礼〕が食物獲得にも使われる。ミカンが投げられたとき, 上位者が満腹しているなどほしくない場合, ミカンをとらずに下位者のうしろへ行き, プレゼンティングをさせる。マウンティングが終ると上位者はその場に坐り, 下位者はその目の前でミカンをとって食べる(21, P.58)。そのあとでグルーミングさせることもある。体が弱っているサルにリップ・スマッキングをして餌をとらせたりする(21, P.59)。このようなシンボリックな行動がみられるのはオスの間だけである。ワカオスどうしの間ではうまくいかず, トラブルを起すことが多く, メスの場合は劣位個体に餌をとらしてやっても, あとで攻撃をかける(18, P.93)。

(3) ボスの処罰と叱責を恐れる態度

母がその赤ん坊をせわするしかたは霊長類の全種にわたってだいたい似ている。つぎに述べることはマカックとヒヒに共通する。最初の2・3週間ぐらいは母親は赤ん坊をはなさない。第4週ぐらいから赤ん坊は母をはなれ始め, だんだん遠くへうろつく。母親はあまり遠くへいこうとするとつれもどす。危険があるとかかえて逃げ去る。母親の落した食物のかけらを口に入れたり, その植物をとって味ってみたりする。こうして食べ物を学ぶ。ところが乳児が自分で食物をとって食べることをゆるさない。すぐ母親はとり上げてしまうばかりでなく, 口の中に手を入れて強引にとり出し, 自分で食べてしまう(28, P.192)。しかしラングールでは第3月から乳児は固形食で補い, 母親の食べる植物を集める。小さなかけらを母の手や口からとる。

母親は食物を分ち与えたりしないし自分のほしい食物を少しでも乳児が手に入れると、手や口からとり上げる(14, P.292).

いよいよ離乳期(ニホンザル・ボンネット8—12月, ブタオザル5—8月, ラングール・ヒヒ12—15月)になると, 母親は乳児をこぼむ. 始めは拒否もおだやかで, からだの向きをかえたり, 腕をあげたり, 額をおしつけてはなしたりする. 乳首を乳児の口からひっぱり出す. だんだんとはげしいしかたになり, おどかしたり, 傷つけない程度でかんだりする. 「罰の制止(punitive deterrence)」とか「罰(punishment)」とか言われているものである. 離乳の最後の時期は母子は敵対的な態度になり, たとえばラングールでは乳児は母のまわりをとりまわってわめき, 樹枝をゆすり, 母を打つ(15, P.228). 罰はオスのこどもに対してメスのこどもよりきびしく, 早くから攻撃が加えられる(20, P.414).

イヌは飼主である人間をボスとみて服従するが, サルは階序制の中に人間と自分を組みこむ. イヌは同一の主人に忠実につかえるが, サルは優者につくのである. この相異は両者の行動をつかむために重要である. 飼いザルは接触する人間を順位づける. 飼育管理者が最高順位者であることがふつうであるが, かならずしもそうとはかぎらない. 食物を与えることがそれだけでサルとの心理的・社会的なつながりを緊密にするものではないことは, すでにイヌにおいて示されていた. 浅倉繁春によると, おりの前に立った人間のうちのきまった人を攻撃する. 上位に格づけされた人にはへつらい, 下位に位づけされた人にはおどしをかける. この人間の順位が人の変更(管理者の交代その他)や場所の移動によってかわるのである(2, p.99). ニホンザルのメスの「タキ」がせわをするIがくると彼をうしろだてとしてほかの者をおどし, 飼育管理者の間直之助がくるとIをおどした. しかしオスのボスザルができると間を攻撃した(21, P.53—4; 11, P.154—5). 川辺寿美子に飼育されたサルたちが, 人間社会の身分には関係なく川辺を最高順位者として来訪者を威嚇攻撃した. しかしサル研究仲間の彼女の夫とおりの前にならんだときには, 母親をつとめてきた彼女がくらがえされて攻撃された. サルが服するのは男であるとか身体が大きいとかではなく, サルを真に理解している人, あつかいなれている人に対してである. 捕獲の経験をもっている人たちには, 2・3日も接触すると, かれらに従順になってしまう(17, P.157—60). 浅倉も長年のサルの飼育者に対しては, 初めての顔合せでもサルが高い順位づけをすることを述べている(2, P.109). 子母澤寛も手におえない猛猿たちが彼に対しては従順で, 箱から出されると彼の股の間に入ってきて背中をおしつけるようにしてしゃがみ, 話しかけるとこちらをむいて口をつき出してしきりに語ったり, また見ているとやってきて口をとがらせて話しかけ, ころがって青いきれいな腹をみせたりしたことを書いている(27, P.11—8).

子母澤は「サルの急所は首ねっで, 相手にそこをかまれると降参する」と猿廻しに教えられた. 彼はすぐひとにかみつくと乱暴なサルに対して, キャラメルをやっておいてゆだんさせ, 首にかみついている分間はなさなかった. サルは悲鳴をあげたが, 後になるとひどくやさしい調

子で語りながら、だきついてきた。その後どんなにひどくたたかれてもいちども反抗的な態度をみせなかった(27, P.20—1)。間もタキに不意におそわれて傷あとだらけにされたが、あるとき素手で格闘したあげく、タキの首すじをつかまえて、膝下にくみしいて以来、攻撃されなかった(11, P.35)。

サルをしつけることは、イヌとちがって非常にむづかしく、また猛獣性が残っていていつ豹変するかわからない。生後5日ぐらいのパタスをもらって育てたボルウィヒは、サルがさわりたいものにさわらないように言って抑止すること、盗ろうとするものをとることができないようにすることはむづかしいと言う。サルを罰によって訓練することは、ほとんど望みがない。彼のパタスを否定的な方法によって、盗んだり、物を床にひきずりおろしたり、本や用紙をかんだりさいたりすることをしないようにいろいろ試みたが、すべて完全に失敗に終わった。中和的な方法として、じゃましないことでサルに興味を失わせるやりかたがある。テーブルから小さなものを盗り、飼育者が追ってくるものと期待して、飼育者をみながら、いつでも落してやろうとしていた。ところがこちらがそうしなかったので、そうっと床に置いた。積極的な方法として、動物の関心をほかのものへうつすやりかたもある。テーブルにのぼってなにか貴重なものをおかばらおうとした。そのときトイレットペーパーを床に落してころがし、サルにさわらせまいとするようによそおって、かがんで拾った。サルは最初のもののことを忘れて、トイレットペーパーのところきた(3, P.321—3)。

報告 タロウ カニクイザル ♂ 9才(塚本)

赤ん坊のときから8年飼っている。「るす番しておいで」と言ってでかけると、金庫のそばの自分の場所に帰るまでいる。金庫に誰かがさわると、攻撃する。いたずらをしたときはおとなしくしている。ふかしいもをだまっただけはほぼったときなど、出てこない。わるいことをしたときは、キッとなき、飼主である若主人がくると、口をもぐもぐして、「ごめん」を言う。若主人が叱るとおこらないが、老主人夫妻が叱ると、歯をむいて攻撃する。従業員が叱ると、おどしをかけ、ほったたたくこともある。食べてはいけないうちもきかない。すきがあったら、とろうとする。

テスト 1966.2.26

飼育者の若主人がみかんをむいて、ふくろを見せる。食べようとする。「しっ！」と制止する。くりかえして、なかなか与えない。リップ・スマッキングをして、くれとせがむ。

従業員がみかんのふくろを見せると、始めからほえる。「しっ！」と叱って、やらないと、物すぐくほえたてる。馬鹿にして、まったく言うことをきかない態度である。近くにいた若主人がいなくなると攻撃は減衰する。

サルの顔面は毛がとれて微妙な表情ができるので、複雑なコミュニケーションに使うことができる。またボルウィヒによると、人間に飼育されたサル(とくにヒヒとマンガベイ)は、野生の動物では決して観察されないところの、しばしばオーバーな顔面運動とマンネリズムを示すと言う。それは人間の主人のまねをしようとするのか、あるいはそれよりも数多いだろうと思うが、人間が動物をよく見ず、解釈するのにおそいので、自分を理解してもらうために、身ぶりを大きくさせられるかどちらかだろう。霊長類は人間から表情のあるマンネリズムを学ぶだろうが、なかまといるときはめったに示さない(4, P.190)。

じっとにらむこと (**steady gaze**) は霊長類のもっとも自信のあるおどしである(1, P.100). 水原洋城によると, にらむことは威かくの1種だが, にらんで相手がへこまなければ, とびかかっていくというのではない「にらみ」がニホンザルに明らかに認められる(24). 「叱る」こともニホンザルに現われている. 多いのはリーダーやそれにつづくオスたちにおいてであるが, かならずしもかれらにかぎられていない. 群れの中心部でメスたちの間で争いが起ったり, 若いオスが侵入してメスやこどもを攻撃したような場合, リーダーは<ga・ga・ga>の音声を発しながらかけつけるか, 動かずにこの音声を出す. 前の場合犯人の逃走をみこんでいるし, 後の場合だいたい声だけで効果がある. 音声による叱責の役割をはたしているのである. 静かに樹上で採食しているような場合, 1頭が枝をあやまって折って大きな音を立てたときに, ほかのサルたちがいっせいにこの音声を発する. 驚き, 1種の興奮, 叱責といった内容が含まれている(13, P.321).

ワカモノの出すぎた行為に対しては, リーダーはマウンティングをして, たしなめる(18, P.94-5). 中心部に入るといふ違反行為をしたワカモノに対しては, リーダーは単独あるいは共同でこらしめ, ひどいときは半死半生の目にあわせる. メスや年少のオスの違反に対しては軽やかむ. ヒヒのオトナに子どもがなにかいたずらをしたり, まちがいをしてかすと, すぐその場で罰をあたえる. つかまえて, その首ねっこをひとつかみする. 歯はしかし皮膚を破らない. こどもはキッとないて地面にちぢこまる. オトナオスは赤ん坊に対しては寛容だが, 2才ぐらいになるときびしいしつけをする(8, 訳 P.165).

中央部侵入などの違犯に対しては, メスたちがまずさわぎたてる. こどももワカモノたちもリーダーたちといっしょになってほえる. 川村俊蔵(談話)は違犯者の母親もきょうだいも攻撃すると語る. 社会規範としての「おきて」の存在がはっきり現われていると思う. 内部抑制は類人猿にくらべて格段のひらきがあるが, おきての存在とその違犯に対する集団の非難と制裁は, 階序制のきびしいニホンザルなどの狭鼻猿にずっと顕著にみとめられる. 今西錦司(私信)は No.2 のリーダーがその足もとに投げられたピーナッツをとらないで, これを No.1 のリーダーにとらせるのも, リーダーたちが子守り行動(後出「父性的世話行動」)をするのも, すべて **pre-moral** な現象と解する. クラス(ステータスという用語の方がポピュラーである)や順位にもとづく上述のような社会的態度を河合雅雄は「マナー」とか「礼儀」とか呼んでいる. 人類の社会では礼儀は慣習から道徳への中途にあるものであり, したがって道徳的なものをなかば含んでいる. サルの集団にはさまざまな「前道徳 (**pre-morals**)」が起っている. 筆者はそれが人間の道徳に類似してはいても, 質的に異なり, いくら発展しても人間の道徳には達することができないという意味において「類道徳〔下道徳〕 (**sub-morals**)」という用語を昨年からは使い, 未開人や化石人類や幼児などのヒトのだけに「前道徳」をあてることにしている(29, P.85).

サルは子どものときからそんな礼儀作法をしつけられる. 隔離飼育されたサルを群れの中に入れると, 平気で優位者の前でしっぽを立て, 食物をひろう. しばらくは見のがされている

が、やがて手痛い制裁によって身におぼえさせられる(22, P.13).

伊谷純一郎は主として高崎山のサルで、リーダーまたはサブリーダーが1才児、ときどきは2才児を母親がやるように保護するという「父性的世話」行動を見出した。あるオトナオスが一定の幼児をだき、腰にのせ、いっしょに歩き、あそんでやり、グルーミングをし、危険なときには保護する。そのこどもはオトナオスの強いバックで食物を優先的にとれる(12, P.89-92)。子どもなかまとあそびじゃれていた乳児が悲鳴をあげると、ヒヒのオトナオスはそちらをにらみ、時にはやわらかくなる。それで乳児をつかんでいた者ははなす。オトナオスが立ち上ると、逃げ去る(7, P.317)。ヒヒの病気の乳児が出された食物をBオスの保護のもとで食べた。これに対してCオスがBオスと近くにいたAオスにうるさくほえた(9, P.66)。父性的行動は狭鼻猿ではマカックやハレムをつくるハマドリアンにしばしばあらわれるが、広鼻猿には広くみとめられるし、原猿の一部にも見られる(20)ので、これだけで類人猿につづく高度なカルチャーであるとするわけにはいかない。

「食物分配」はサルには起らないが、例外的に、しかも広鼻猿のホエザルについて、つぎのようなカーペンターの観察がある。母親が芽のいっばいついたこずえの小枝をひっぱり、いくらか食べたあと、残りをいっしょにいた幼児にやった。こどもは食物を少しづつかんだ(5, P.53)。

食物を乞う態度もサルでは、ピーナッツをもっている人のズボンやスカートのすそをひっぱるぐらいで、はっきり出していない。しかし幸島のサルは80%近くが研究者にお頂戴行動をする。ほかの餌づけ地のように餌をあたえずじらしたり、いじめたりしないので、かっぱらうという直接行動に出ず、待つことをおぼえた。二の腕は脇につけ一の腕だけを水平に出すもの、立って両手をあげるもの、一の腕を下段にかまえて掌をみせるものなど変異はあるが、食物はほかの手でとるのだから、シンボリックだと河合雅雄は言う(19, P.20)。

あやまる態度もサルでは不明確である。子母澤寛は、「すみません」とこちらで言って、両手をついていねいにおじぎをする芸当をしこんだ。みんながサルに小さな声で「どうして…」という、ぺこりとおじぎをする。「どうしてこんなことを…」、「どうしてこのサルは…」といわれて、ぶたれるので、それをさけるためにむすびついたのである。奥さんの腕をかんだので力いっぱいあごをなぐりつけたら、地べたへ手をついてしきりにわびた(27, P.35-6)。これはしかしボスに攻撃をかんべんしてもらおう態度にとどまっている。

(4) 叱られてわるびれる態度

ロレンツなどのエソロジストも動物の行動の「自発性」や「主観的体験」について唱えるが、生理的・衝動的なものが基調になっている。サルになるとさうとう複雑な心理的葛藤や自己意識あるいは精神的困苦が経験され、さうとうな程度の内部抑制が働いていると考えられる。

ニホンザルのこどもを隔離飼育した川辺寿美子によると、生後18~9日ぐらいで「スネ行動」があらわれ、5か月ぐらいがピークで、6月目ではほとんどなくなった。あおむけにころんで

〈ギャーギャー〉と悲鳴をあげ、動こうとしない。そちらを見ると顔をそむけ、去ろうとする。と一段と声をはり上げた(17, P.442-3)。人間の幼児の第1反抗期にあたる。なんでも自分でたく、よんでも返事をしなかったり、逃げたりする(18, P.176)。パタスの数か月の幼児でも、よんでも戻ってこないということが何回も起ったという記述がある(3, P.313)。「自己」にもとづく「反抗」といった態度などが、サルよりも微妙な人間とのコミュニケーションができる飼いイヌに欠けている。飼いイヌはわるく言えば「どれい」になり下っている。足をふまれても飼主にしっぽをふってへつらう。オオカミにそんなことをしたら、みかぎられてしまう。イヌには「自尊心 (dignity)」が失なわれているとキャリガーは述べる(6, 訳 P.57)。

「ごまかし」もイヌには珍らしい。サルにはしばしば見られるが、チンパンジーなどにくらべると質量ともに格段に落ちる。子母澤寛が便所へ立つふりをして鍵穴からのぞいていると、ふとんの中にねていたサルが首をもたげ、机の上にとびあがり、原稿用紙をめちゃめちゃにのみやぶる。扉をあけるとサルはあわてて原稿用紙をほおりだし、なんにもしないよというような顔つきをして、あごをつきだしてそこここをかいている(27, P.39)。

「サルは人間のいろいろなとりあつかいに非常に敏感である；かわいがるときらう、賞め鼓舞するとがめる、たのしいうれしがらせと傷つける冷めたい嘲笑、愛撫とちよう罰に」とブレーム (Brehm, A. E. 'Tier Leben') が述べている(30, P.139参照)。前出のカニクイザルのタロウも「バカ」と言われたり、悪口を言われていると、ホウホウと口をとがらせて、ふきかける。「おりこうさんね」と言うと、からだをゆすってよろこぶ。

伊谷純一郎は高崎山群のニホンザルの音声をも種類、37種に分類した。前述の「叱る」声は攻撃的な音声のC群に属する。A群は感情的に平静なときの音声で、その6の〈ngru〉は劣位の表出のひとつである。坐っているときは首をうずめるようにし、立っているときはやや首をひっこめて、ときにはわづかに首をふるう。こび・へつらい・おべっかなど優位者にとりいろうとしたり、劣位をあらわして許しを乞うという意味をもつ。口唇運動がまじることもある(13, P.306)。

飼育されたニホンザルのあやまる態度を間直之助から引証する。「叱られていることをやったタキは私を見ると謝罪の意をあらわした。何を叱られるかもわからなかったであろう。叱られててひどい目にあわれるのをこばもうとする。」(11, P.177)「モン (オス2才余) はいつの頃か私のめがねをとるくせがついたが、私が強く叱ったら、スースー言いながら私の足もとにきて許しを求めた。愛撫してやったら、にわかに元気づいて、トリを威嚇に行った。」(11, P.201)。これだけなら、叱責をおそれて、かんべんしてくれという態度にすぎない。

「私はもう一度タキを叱りつけた。彼女はすすぐと木をおりてきて、途中の股のところまでくると、そこにうずくまり、うつむいて木の皮をむしりはじめた。サルことにメスザルは叱られたり、しくじったりした後は、しばしばこのように木の皮や土くれや自分の毛をむしる習性がある。」「昔の娘が恥かしいとき、たたみのへりをむしったしぐさ」である(11, P.174)。ボルウィヒはパタスが叱られたりして、軽く動転したとき、おかしい格好をすると言う。あご

やほほや胸を床に押しつける。趾をのぼして腹を上高く上げる。そのあとで趾の指を手でつかんで、横やおむけにころがった。床にあごや胸をつけるのは気持を静めるためだろうが、これは小さな動転から起った転位行動 (displacement) である(3, P.311)。タキのむしり行動も転位行動に由来するものではあるが、もう少しは高いところの、内面的な、自己意識的なものを含んでいるものである。だがサルではイヌよりもわるびれるという態度がうすい。食物についても、かっぱらうという性格が強く残っていて、ぬすみ食いという態度はサルでもまだはっきりと現われていない。

引 用 文 献

1. Andrew, R. J. : 1963. The origin and evolution of the calls and facial expressions of the primates. *Behaviour*. Vol. XX, pt.1—2.
2. 浅倉繁春 : 1958. 「サルによる人間の順位づけについて」 *Primates*. Vol. 1. No. 2.
3. Bolwig, N. : 1963. Bringing up a young monkey. *Behaviour*. Vol. XXI, pt. 3—4.
4. ——— : 1964. Facial expression in primates with remarks on a parallel development in certain carnivores. *Behaviour*. Vol. XXII, pt.3—4.
5. Carpenter, C. R. : 1964. A field study of the behavior and social relations of howling monkeys. *Naturalistic Behavior of Nonhuman Primates*.
6. Carrigar, S. : 1965. *Wild Heritage*. 藤原栄訳『野性の遺産』
7. DeVore, I. : 1963. Mother-infant relations in free-ranging baboon. *Maternal Behavior in Mammals* (Rheingold, H. L. ed.).
8. Eimerl, S. & DeVore, I : 1965. *Primates*. 宮地伝三郎訳『霊長類』
9. Hall, K. R. L. & DeVore, I : 1965. Baboon social behavior. *Primate Behavior* (DeVore, I. ed.).
10. Hall, K. R. L. : 1968. Behavior and ecology of the wild patas monkey in Uganda. *Primates* (Jay, p. c. ed.).
11. 間直之助 : 1954. 『猿の愛情』
12. 伊谷純一郎 : 1959. Paternal care in the wild Japanese monkeys. *Primates*. Vol. 2 No. 1.
13. ——— : 1965. 「野生ニホンザルの音声伝達」 『サル—社会学的考察』
14. Jay, p. : 1963. Mother-infant relations in langurs. *Maternal Behavior in Mammals* (Rheingold, H. L. ed.).
15. ——— : 1965. The common langur of North India. *Primate Behavior* (DeVore, I. ed.).
16. Kaufman, J. A. : 1967. Social relations of adult males in a free-ranging band of rhesus monkeys. *Social Communication among Primates* (Altman, S. A. ed.).
17. 川辺寿美子 : 1964. 『サルの赤ちゃん』
18. 河合雅雄 : 1964. 『ニホンザルの生態』
19. ——— : 1965. Newly-acquired pre-cultural behavior of the natural troop of Japanese monkeys on Koshima Islet. *Primates*. Vol. 6, No. 1.

20. Mitchel, G.D. : 1969. Paternalistic behavior in primates. Psychol. Bulletin. Vol. 71, No. 6.
21. 宮地伝三郎 : 1966. 『サルの話』
22. ——— : 1969. 『動物社会』
23. 水原洋城 : 1964. 「餌をゆずる」 『モンキー』 No.78.
24. ——— : 1965. 「にらむ」 『モンキー』 No.85.
25. Morris, D. : 1967. The Naked Ape. 日高敏隆訳『裸のサル』
26. Schmidt, H. D. : 1957. Zur Sozialpsychologie des Hundes. Z. Psychol. Bd. 161, Ht. 3—4.
27. 子母澤寛 : 1962. 『愛猿記』
28. Simonds, P. E. : 1965. The bonnet macaque in South India. Primate Behavior (DeVore, I. ed.).
29. 鳥居正夫 : 1970. 「動物の <モラル> のレベルについて」 『科学哲学』 (日本科学哲学会編) III.
30. Westermarck, E. : 1906. The Origin and Development of the Moral Ideas. Vol. II.

(昭和45年9月29日受理)